

エッセイ

北の大地より

さっぽろ時計台通信 (26)



札幌医科大学医学部 遺伝医学 教授
札幌医科大学附属病院 遺伝子診療室 室長
櫻井 晃洋



これまで「遺伝」や「遺伝子」をテーマに、その時々には思いついたことを自由に書かせていただきましたが、今回は最終回になります。

大学医学部の教員という仕事柄、学会や講義など、日本の各地に出かける機会が多く（すべての都道府県に仕事で行きました）、そして時には海外にも足を運びます（今年はイタリア、ベトナム、インドネシア、南アフリカに行きました）。そうした中で感じるのは、日本、そして日本に住む人々はどこに行っても、とても均一に見えるということです。例外があるとすれば、沖縄と北海道でしょうか。沖縄は、かつては琉球王国でしたし、北海道はアイヌの人たちの土地でした。沖縄に行くとき、いかにも沖縄人らしい顔つきの人に出会いますし、北海道でも、時々アイヌ人を祖先に持つと思われる人に会います。西郷どんに出演していた二階堂ふみさんは、いかにも沖縄出身の方らしい顔立ちですし、宇梶剛士さんの彫りの深い顔は、アイヌ人であるお母さんの影響かもしれません。さらに海外に行けば、肌や目の色、髪の特徴など、一目で違いがわかる特徴を持つ、さまざまな人々が暮らしています。こうした違いを、私たちは人種とか民族と呼んでいます。

私たちが両親から受け継ぎ、生まれた時から持っていて、子どもたちに伝えていく遺伝情報、DNAに書かれた暗号は、お互いに99.7%同じです。つまり0.3%の違いが、私たちひとりひとりの体質的な個性を作っています。そして、この数字は、皆さんのDNAを皆さんのすぐそばにいる日本人と比べた時も、遠いアフリカに住む誰かと比べた時もほぼ変わりません。肌や髪の色

色のように、見た目で見立つ部分で、私たちは人々を「分類」していたのですが、遺伝学的にはそれはあまり意味がないということになります。それよりも私たちの行動や考え方、健康に影響を与えるのは生活習慣や住んでいる地域の文化など、外的な要因のほうが大きいと言えます。

ひとりひとりの体質的な個性は、生まれつき持っている遺伝的な個人差と環境、そして年齢という時間によって紡ぎだされていきます。個人の特徴のうちには、たしかに遺伝子だけで決まる部分もありますが、ひとりの人格全体からすれば、遺伝子で規定される部分というのは、多くの人たちが考えているほどには、強くないと言ってよいと思います。そして、遺伝情報があなたとまったく同じという人は、地球上にひとりもいません。ひとりひとりがすべて遺伝的に唯一の存在です。「みんなちがってみんないい」は、詩人金子みすゞの言葉ですが、遺伝学が目指すところも、まさしくこの考えの実現なのです。

それでは皆さま、長きにわたって私のつたないエッセイをお読みくださりありがとうございました。これから寒くなりますが、どうぞお元気でお過ごしください。



札幌医科大学遺伝医学教室の
マスコットキャラクター、サンとミーナ

櫻井先生は、信州大学より、北海道に赴任され、大学に「遺伝外来」を開設、大学院では、北海道で唯一の遺伝カウンセラー養成の修士課程を開設し、教室も、立ち上げから現在は20名近い教室員の皆さんにと、充実に邁進されてきました。そのようなご多用な中でも、これからの医療の大きな柱の1つ、「遺伝医学、遺伝子診療」を、毎号、分かりやすく、正しい理解と更に興味を持てるように、と執筆いただき、2014年4.5月号より、4年半に渡るシリーズ、となりました。

多くの読者の方より、「とても勉強になる、毎号楽しみにしている！」と、お声をいただいております。今号で最終になりましたが、櫻井先生の益々のご活躍をご祈念申し上げますと共に、また、ご寄稿をいただけることをお待ちしております。（編集者一同）